

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 小松 佑子

本論文は、チャイコフスキイのオペラ《マゼーパ》に関する総合的な研究である。この作品の原作となったプーシキンの叙事詩『ポルタヴァ』との比較から、ポルタヴァの戦いとマゼーパに関する歴史的な一次資料の再検討、楽曲分析を踏まえたチャイコフスキイの美学と世界観の関係の分析、作曲家の伝記的側面と特に宗教観の変化に至るまで、様々な観点から多面的にオペラにアプローチし、これまで本格的に研究されることがほとんどなかった《マゼーパ》に新たな光を当てることになった。

全体は、先行研究を概観した序章、本論をなす第1章から第5章、結論にあたる終章から構成されている。

第1章では、オペラ《マゼーパ》に至るまでのチャイコフスキイの伝記と、彼が抱えていた精神的な問題、特に信仰の問題が、フォン・メック夫人との往復書簡の分析を通じて概観される。

第2章と第3章はチャイコフスキイのオペラの美学を扱う。まず《マゼーパ》に先行する6作のオペラを再検討し、それに比べて《マゼーパ》が異質な要素を取り込んだ作品であることを確認する。この変化の背景にあるチャイコフスキイの思想的転回を探るために、フォン・メック夫人との書簡の他、トルストイとショーペンハウアーの思想的影響が検討される。

第4章は、プーシキンが依拠したバントイシュ＝カメンスキイ著『小ロシア史』の内容を、プーシキンの叙事詩と詳細に照合し、プーシキンがどの程度まで史実に忠実であったのかを検証する。その結果明らかになったのは、プーシキンが歴史的な真実を尊重しながらも、かなりの程度ロマン主義的な脚色を行っていたことである。

第5章はプーシキンの叙事詩とオペラの内容を、原作テキストとオペラのスコアに即して細部にいたるまで緻密に比較しながら、原作とオペラの間で異なっている点、特にマゼーパの人物造形の根本的な相違を明らかにする。

以上の分析を踏まえ、終章では、チャイコフスキイがオペラ《マゼーパ》によって、自分のオペラ美学を革新することに成功した背景には、作曲家自身の世界観の変化、特に信仰心の深まりがあったことが確認される。音楽的表現と信仰の関係は客観的に立証しにくい微妙な研究領域であり、本論文の中にも今後の更なる調査・検討が必要な仮説にとどまる主張が残っているが、著者は伝記的資料を博搜したうえで、詳細な作品分析を通じて説得力ある結論を導いている。またプーシキンの原作や歴史的史料との関係の詳細な分析についても、本論文は重要な成果を挙げている。作曲家と宗教の関係についてはロシアではソ連時代に研究が推奨されていなかったため、本格的な先行研究がいまだにないのが現状である。本論文はそういった分野に新たに切り込んでいったという意味で、先駆性とオリジナリティの高い研究として評価できる。それゆえ、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断する。